

[特集]

江戸の写生図

— 可憐なる花卉図の源泉 —

2015年9月29日(火)～10月25日(日)

東京国立博物館 本館特別2室

古来人々は、目の前の対象を観察し、ありのままに描く「写生」を行ってきました。江戸時代中期には博物学が興隆し、動植物を写生し、記録することが重視されました。屏風や画帖などにも、博物図譜さながらの多彩な動植物が描かれるようになります。このような博物学と絵画との共鳴や、江戸の写生図の鮮やかな開花には萌芽の時期がありました。

江戸の写生図が芽吹いたのは江戸時代初期、寛文年間(1661～73)頃のことです。とくに狩野探幽(1602～74)筆「草花写生図巻」と狩野常信(1636～1713)筆「草花魚貝虫類写生図巻」はその先駆的作例といえます。探幽と常信は、写生の構図や描法において、中国絵画や日本の伝統的花鳥図を手本としました。その一方で万治年間(1658～61)にオランダから舶載された植物図の影響も受けていたとみられます。この特集では幕府御用絵師の探幽と常信に焦点をあてて、写生図が江戸文化に可憐な彩りを添えていく萌芽の時期をご紹介します。

Thematic Exhibition Sketches from Nature in the Early Edo Period

Tuesday, September 29 — Sunday, October 25, 2015

Room T2, Honkan, Tokyo National Museum

From long ago, people have observed and made faithful sketches of the things around them. In Japan, by the middle of the Edo period (1603–1868), the study of natural history flourished and it was considered important to make sketches of plants and animals as records. From around this time, a variety of plants and animals like those seen in natural history catalogues were painted on folding screens and in albums. This was a high point for sketches from nature and the paintings influenced by these sketches.

Edo-period sketches from nature can be traced back to the Kanbun era (1661–1673). Pioneering works include *Sketches of Flowering Plants* by Kano Tan'yu (1602–74) and *Sketches of Flowering Plants, Fish, Shellfish, and Insects* by Kano Tsunenobu (1636–1713). These two artists learned composition and sketching techniques for realistic depiction from Chinese painting as well as traditional Japanese flower and bird painting. Their works appear to have been influenced also by the sketches of plants that had been brought to Japan from the Netherlands in the preceding Manji era (1658–1661).

By focusing on the achievement of Tan'yu and Tsunenobu, prominent painters who belonged to the Kano school, the official school of painting for the shogunate, this exhibition sheds light on the period during which sketches added a vibrant charm to the culture of the Edo period.

江戸の写生図—記録すること、再現すること—



(図1) 草花生写図巻 雑「唐なすび(トマト)」 狩野探幽筆 東京国立博物館 江戸時代・寛文8年(1668)

江戸時代の写生図の最も早い作例は、狩野探幽筆「草花生写図巻」5巻(図1、東京国立博物館)と「草花生写図巻」(京都国立博物館)です(以下、探幽本と称します)。わが国では古くから写生が行なわれ、そこから優れた絵画作品が生まれてきました。しかし現存する写生図は多くはありません。

写生は古くは「生写」と記され、生写しと呼ばれていました。その言葉には写生のもつ現在性、直接性という特質がよくあらわれています。「今ここに在るものを直に観て写すこと」を写生とするならば、寛永年間(1624~45)に描かれはじめる立花図も、広義の写生図といえるでしょう。立花とは今でいう生け花のことですが、江戸時代初期に大成され、多くの花伝書が記されます。立花図は花伝書に収められた理念的な図ではなく、実際の立花を記録したものです。花の一時の姿を記録するために写生が行なわれました。桂宮家に伝来した「立花図屏風」(図2)は、2代池坊専好(1575~1658)による寛永5~12年(1628~35)の立花を写し留めたものです。



(図2) 立花図屏風 筆者不詳 東京国立博物館 江戸時代・17世紀

では、絵師は写生をどのように絵画制作に活かしていたのでしょうか。探幽の場合、本画(完成画)に写生図の影響をみることは、ほとんどありません。探幽はむしろ古典を重視し、伝統的画題や図様を大切にしていた絵師です。

探幽が規範としたのは中国画でした。「果実図」(図3)は中国画の学習から生まれた作品といえます。しかし「果実図」

における枇杷、李、楊梅(ヤマモモ)の繊細な彩色法や、青磁、堆朱の質感の描写をみると、対象をありのままに描こうと苦心したことがわかります。たとえば堆朱では、薄墨に濃墨や朱を重ねることで漆器の重厚さを再現しようとしています。対象を再現することを写実画法と呼ぶならば「果実図」はそれにほかなりません。対象の再現の試みのなかで、探幽が写生を行なったことはまちがいないといえます。



(図3) 果実図(部分) 狩野探幽筆 東京国立博物館 江戸時代・17世紀

ところで、探幽には「獺図」(福岡市美術館、参考図1)という写実画法の作品があります。「獺図」は目の前のカウソをありのままに描いた作品で、現在性と直接性に貫かれています。探幽がなぜ「獺図」を描いたのか定かではありませんが、探幽が晩年にオランダの文化に触れたことと関連するかもしれません。万治2年(1659)には世界的な植物図鑑のドネウス著『草木誌』、寛文3年(1663)にはヨントン著『動物図説』が幕府に献上されます。そうした書物の挿図から大きな影響を受けたと考えるもおかしくありません。



(参考図1) 獺図 狩野探幽筆 福岡市美術館(黒田資料) 江戸時代・17世紀

探幽は小田原藩主・稲葉正則^{いなばまさのり}（1623～96）と親しく、正則は幕府のオランダ交易を取り仕切っていました。オランダ商館からドネウス著『草木誌』を受け取ったのも正則でした。正則は「印刷があまりにも小さい」とし、「もっと大きな、より美麗に描いたもの」を要請してその本を返却したといえます。『草木誌』は縦41cmの大判の書籍なので、小さいと判断されたのは挿絵であったと思われます。正則が探幽に『草木誌』をみせたと仮定すると、より大きな西洋の植物図を欲したのは、探幽その人だったのかもしれませんが。探幽本のオランダナデシコ（図4）と『草木誌』のカーネーションの図（図5）を比較すると、あながちその仮説はまちがいで

はないように思えます。

江戸の写生図は探幽からはじまりました。探幽は、なにげない野の花や舶来の植物を何の銜もなく淡々と写しつづけました。奥絵師*として文化の最先端にふれえた探幽は、その写生図に江戸の新たな潮流をも写し取っていたのではないのでしょうか。

*奥絵師…御用絵師のなかで最も格式の高い職位



（図4）草花写生図巻 秋「(オランダナデシコ)」
狩野探幽筆 東京国立博物館 江戸時代・17世紀



（図5）『草木誌』
レンベルトウス・ドドネウス著
東京国立博物館
ベルギー・1644年版

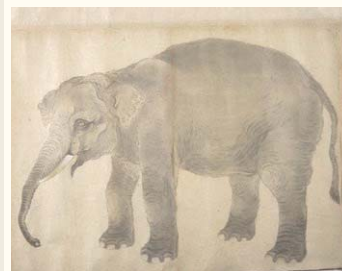
探幽から常信へ—木挽町狩野家に受け継がれたもの—

年紀によると探幽本は万治4年（1661）に、常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」（以下、常信本と称します）は同年の寛文元年に描かれはじめました。探幽は60歳、常信は26歳でした。また探幽本と常信本には同日に丹波で描かれた「よめか小袋（マユミ）」の図が収められています。これは探幽と常信がともに写生を行なったことを示しています。また同一の植物に同じ通称を記す例もみられ、若き常信に写生を指導したのは探幽その人だったと考えられます。

探幽本では花や葉の色、葉の数などが記されるほか、「この花よし」など形体の良し悪しにふれるにとどまっていますが、常信本は植物の開花時期や生態についての細やかな注記があり、虫眼鏡で観察した図までもが収められています。このように探幽本と常信本には写生における意識のちがいが感じられます。

探幽から常信へと受け継がれた写生の精神は、木挽町狩野家の御家芸となります。孫の古信^{ひさのぶ}（1696～1731）の「鳥獸鷹象写生図巻」（東京国立博物館、参考図2）はつとに有名です。古信の子、典信^{みちのぶ}（1730～90）は常信本に「定典信」の印を捺して家宝としました。古信、典信の時代には、渡辺始興^{わたなべしこう}（1683～1755）や円山応挙^{まるやまおうきよ}（1733～95）といった写生を得意とする絵師が登場しますが、その頃には博物学の興隆とあいまって、写生による記録が重視され、美術のみならず実学にも活用されていきました。しかしながら現存作例をみても、探幽や常信に比肩する作品は多くありません。対象があるがままに描くことがいかに難しいかがわかります。

探幽から常信へ手渡された写生の画法は、探幽が中国画から学んだものでした。探幽は李迪^{りてき}の「紅白芙蓉図」（東京国



（参考図2）鳥獸鷹象写生図巻
狩野古信筆 東京国立博物館
江戸時代・18世紀

立博物館）をはじめ、多くの古画を模写しました。常信も探幽に倣って多くの古画を鑑定し、縮図を遺しています。木挽町狩野家の歴代当主が模写した「唐画手鑑」には、探幽や常信が規範としたせんぜん^{せんぜん}しゆんきよ^{しゆんきよ}銭選（舜挙）などの花卉図が数図収められていま

す。そのうちの「葵図」（図6）をみると、枯れた虫損のある葉を忠実に模写しています。常信と交友のあった近衛家熙^{このえいひろ}（1667～1736）は『槐記』に「(舜挙の)此葵ノ花ヲ見ヨ、皆々見事ニハ書カズ」と、散りゆく花もあるがままに描くべきと伝えています。これこそが写生の真髓であり、探幽から常信へ、そして家熙をはじめとする江戸の文化人へと伝授され共有された新たな美意識でした。この新たな美、江戸の写生図は、探幽と常信を出発点として、可憐に花開いていくことになるのです。



（図6）唐画手鑑 巻1「葵図」 狩野常信筆
東京国立博物館 江戸時代・17世紀

草花魚貝虫類写生図巻 狩野常信筆

東京国立博物館 江戸時代・17～18世紀 全29巻

Sketches of Flowering Plants, Fish, Shellfish, and Insects By Kano Tsunenobu

「草花魚貝虫類写生図巻」は木挽町狩野家に伝来した29巻の写生図巻です。筆者は常信。常信は、伯父・探幽の様式をよく踏襲し、障壁画において最も格式の高い紫宸殿賢聖障子絵を手がけ、最高位の法印に叙任された絵師です。この図巻は1月から12月の植物写生図(25巻)、大判の写生図(1巻)、虫類の写生図(1巻)、魚貝の写生図(2巻)から構成されており、寛文元年(1661)から

正徳2年(1712)の年紀があり、26歳から亡くなる前年までの写生図巻が取られています。おもに江戸で写されたものですが、一部に丹波や鎌倉や東沢という土地での写生図がふくまれます。写生した年月日、被写体の名称や特徴、提供者の名前などが記録されています。被写体の提供者には幕臣が多く関わっていることや、動植物の生態が詳細に記録されていることが特色です。

水戸光圀の異国趣味

巻6は4月の写生図巻です。右から「胡椒」「唐防風」と記された写生図には「水戸様より参候」という注記があり、これらの提供者が水戸藩主・徳川光圀(1628～1701)であることがわかります。常信は、元禄14年(1701)に光圀の遺像「徳川光圀像」(徳川ミュージアム)も描いています。また光圀による句会で常信が詠んだ和歌が「古画備考」に取られています。光圀の伝記「桃源遺事」には、光圀が国内外の珍しい動植物を取

り寄せ、飼育・栽培していたことを記しています。コショウやシナモンも光圀が栽培していたものの一覧にみられます。光圀はそうした蒐集において、南国産ならば伊豆、駿河などの暖か適した土地へ移植するよう配慮したといえます。その目的は「日本のためにと思ふゆゑ也」と伝えられ、日本の産物の豊穡を願ってのことであったことがうかがえます。この数巻の写生図は、常信と光圀との交友のみならず、光圀の五穀豊饒への想いをも伝えています。



草花魚貝虫類写生図巻 巻6「唐防風・につけい・胡椒」

江戸城西の丸の庭園

巻7は5月の写生図巻です。「唐ゆり」と記されたヒメユリの図には、「西ノ丸より参候」という注記があります。このほかにも、江戸城西の丸からケン(巻5)、サンゴジュ(巻14)など、当時まだ希少だった植物が提供されています。西の丸は将軍の隠居所として構築され、北面に「紅葉山」を築き、薬山を連れて「山重丸」と称する庭園が造営されました。この広大な庭園に多種多様な植物が植えられました。西の丸からの植物の提供をみると、「草花魚貝虫類写生図巻」に公的な側面があったとも考えられます。



草花魚貝虫類写生図巻 巻7「唐ゆり・みやまもち」

藩主の殖産政策と「産物」への関心

巻8は5月の写生図巻です。クサフジの図に「名しれず、津軽越中守殿より参候」とあり、弘前藩主・津軽信政が提供したものとわかります。信政は殖産政策を行ない、新田開発や林政に力を注いだ藩主と知られます。また、本草学や動植物の生態に関心を寄せ、寛文5年(1665)に善知鳥(ウトウ)を幕府に献上しました。常信がそのときの個体を写生しています。さらに、弘前藩では信政の治世に阿美蓉(ケン)を栽培し、阿片の秘薬「津軽一粒金丹」を製造しました。このとき弘前藩にケンの栽培と阿片の製造方法を伝授し

た生坂藩主・池田輝録が贈ったノゼンカズラの図も「草花魚貝虫類写生図巻」に取られています(巻11)。

元禄16年頃、国絵図の制作とあわせて全国の地理や産物への関心が高まります。その30余年後には全国の「産物帳」が丹羽正伯(1691～1756)によって編纂されるに至ります。「産物帳」において幕府は、諸国の産物の俗名や形状を調査させました。「草花魚貝虫類写生図巻」はその先駆けと位置づけることができますのではないのでしょうか。



草花魚貝虫類写生図巻 巻8「またたび・名しれず(クサフジ)」

常信の後ろ盾 —大老・堀田正俊—

巻10は6月の写生図巻です。アジサイの図に「てまり、堀田筑前殿下屋敷より参候」と記され、時の大老・堀田正俊(1634～84)の下屋敷より届けられたものとわかります。常信は正俊とたいへん親しかったと伝えられ、戸田茂睡の『御当代記』には、正俊が品川の常信邸を訪れ、ともに活鯛などを食し、芝浦で釣りをしたとあります。このアジサイを贈られた天和2年(1682)に、常信は念願の二十人扶持を賜ります。おそらく正俊は常信の大きな後ろ盾であったと考えられ、一枚のアジサイですが、入念に写生されています。

しかし幕府重臣として栄華を極めた正俊は、貞享元年(1684)に江戸城で福乗正体(1684)に刺殺されるという悲劇にみまわれます。

この正休を討ち取ったひとりが忍藩主・阿部正武。アジサイの図のひとつに「はばそ、阿部飛騨殿より」と記されるクマシデの図がありますが、宝永6年(1709)に正式の子、阿部正高から届けられたものです。正高は同じ年にクマガイソウも提供しています(後掲エッセイ)。動植物を淡々と描き出した写生図の背景を知ることと、江戸時代を生きた人々の息吹も感じることができます。



草花魚貝虫類写生図巻 巻10「はばそ(クマシデ)・幸てまり(アジサイ)」

対峙し正確に写された写生図

巻13は7月の写生図巻です。「そてつ」の花、水野華人正殿ニ有候」とあり、松本藩主・水野忠直(1652～1713)の邸宅で写生されたものとわかります。「まつかさなどのやう也」と注記し、ロゼット状に重なる雄花の特徴が丁寧に写し取られています。淡彩をほどこした墨線の下には、焼炭(木炭)の下描きがのこっており、江戸時代の絵師がどのように写生を行なったかを知ることができます。焼炭は払い落とすことができるので、まず焼炭でプロボショ

ンを探ったうえで、筆で正確な線を決めることができます。写生図とひとくちにいっても、対象を直接観察(対峙)して描いた一次写生図は、のちに門人らによって模写され粉本や絵手本とされました。一次写生図と模写を見極めるには、このソテツの図のように写生のプロセスをのこしたものががかりとなるのです。



草花魚貝虫類写生図巻 巻13「そてつ」



部分図

写生図の新たな構図法 ―全株と折枝―

巻14は7月の写生図巻です。「かのこゆり」をみると、折枝で細部の情報を詳細に描き、そこに全株を描き添えることで個体の特徴を余すところなく記録しようとしていることがわかります。このように全株と折枝を同時に描く構図は、従来にない特殊なものです。「草花魚貝虫類写生図巻」が描かれはじめる2年前の万治2年(1659)に、オランダからドドネウス著「草木誌」(図5)が伝わっていますが、全体と部分を一図に描くことは、すでに16世紀以

降の西洋の植物図で行なわれていました。この構図法は、そうした西洋の植物図の影響を受けたものとも考えられます。

また、このカノコユリの図にも焼炭の下書きがのこっており、対看写生によって、対象を正確に描こうと苦心したことがよくわかります。となりの「さんこしゅ」は江戸城西の丸から届いたサンゴジュの図です。



草花魚貝虫類写生図巻 巻14「さんこしゅ(サンゴジュ)・かのこゆり」

常信が手ずから栽培したナスの図か

巻16は8月の写生図巻です。「茄子」は、花、枝、実にかけて詳細に写され、「はのなり、くいちがい候」と注記があります。これは、ナスの葉が茎の節に一葉ずつ交互につく「互生」という特徴を記録したものです。常信は、品川の邸宅でナスを自栽培しており、それを儒官・人見竹洞(1638~96)に振舞ったという逸話が伝わります(「竹洞真跡」)。この図は、手ずから育てたナスを写生したもののかもしれません。

植物ですが、薬材の原料として古くから知られていました。本図はチョウセンアサガオを描いた早い例とみられます。「草花魚貝虫類写生図巻」には、ほかにも琉球や八丈島、小笠原諸島などの動植物や、多くの外来植物が描かれています。被写体の提供者には、長崎奉行や八丈島代官などもいました。常信が多様な植物を入手したのは人的ネットワークのおかげだったでしょう。写生図をめぐるネットワークは当時の文化状況を照らし出しており、興味が尽きません。

※儒官・幕府で儒学を教授する官吏



草花魚貝虫類写生図巻 巻16「茄子・朝鮮朝顔」

常信のネットワーク ―本多忠英・人見竹洞―

巻18は9月の写生図巻です。「かとりくき、本多肥後守殿より」とあり、山崎藩主・本多忠英(1647~1718)が提供したガガイモの図とわかります。ガガイモは独特な実の形や綿毛に特徴がありますが、常信はそれを詳細に記録しています。忠英は、片桐石州(1605~73)に茶の湯を学び、常信を招いて藩の文化振興に尽くした人でした。ちなみに石州と貞昌は小泉藩主。将軍家綱の茶道指南役となり、石州流茶道の開祖となった人です。門人に徳川光圀、俵料経、丹羽光重などがいましたが、かれらの絵事を務めたのが常信で

した。茶の湯などのネットワークも写生図制作の背景にあったのかもしれませんが。

左の図、赤い実の写生図には「人見同竹より」とあり、常信と親しかった人見竹洞から届けられたものとわかります。竹洞は医師人見玄徳の子として京都に生まれ、江戸にてでて林羅山に從学しました。弟の人見必次は、李時珍『本草綱目』の分類ののっつて、日本の食物440種以上の実証的な食療本草書を著しました。人見家との交流も写生図制作の背景にあったのかもしれませんが。



草花魚貝虫類写生図巻 巻18「(名称不詳)・かとりくき」

毒薬「附子」と豊穡の秋

巻19は、9月の写生図巻です。「烏甲」と記され、トリカブトが流れるような構図で写し取られています。「とりかぶとのねへ日本ノぶし(附子)也」と注記がありますが、トリカブトを原料とする附子は、古くから毒薬とされてきました。たとえば中世に成立した狂言「附子」では、砂糖を附子といつわる主人と太郎冠者、次郎冠者のようすが滑稽に演じられます。近世までトリカブトが絵画に描かれることはありませんでしたが、江戸時代中期になると花卉図の

モチーフとして描かれるようになります。このトリカブトの図はその先駆けといえます。探幽や常信の写生図などが江戸独自の花卉図の源泉となったでしょう。

その左には、京都・金地院から届けられたマツタケが写されています。常信は金地院二世住持最謙元良の肖像を描き、金地院との交流がありました。秋ごとにマツタケが届けられていたのでしょうか。

※肖像・生前に描かれた肖像



草花魚貝虫類写生図巻 巻19「(マツタケ)・烏甲」

エッセイ

トリカブトとクマガイソウ

江戸時代には可憐な花卉図がさまざまな流派の絵師によって描かれました。とくに写生にもづく作例が多く伝わります。たとえば渡辺始興や円山応挙の写生図、伊藤若冲の「動植綵絵」、そして喜多川統善画「画本虫撰」や藩井祐三筆「夏秋草図屏風」などを思い起こすことで。江戸時代には、古典的モチーフを乗り越えて、多種多様な動植物が描き出されるようになるのです。そのモチーフの多彩さは江戸絵画の大きな特色のひとつといえます。しかしすべての絵師が実際に珍しい動植物を目にすることができたわけではありません。例えば伊藤若冲筆「鳥獣花木図屏風」は船載された動物を記録した「唐蘭船持渡鳥獸之図」などを参照していることが指摘されています。同様に多くの絵師が、版本や図譜などを頼りに、新たなモチーフを学び、花卉図や花鳥図を生み出したのです。その転写関係をたどっていくことは、容易ではありませんが、出発点にあったのが探幽・常信の写生図といえるでしょう。

探幽と常信の写生図は、門人に模写され、粉本として活用されました。江戸時代初期に描かれたこれらの写生図は、中期以降の博物学の興隆と共鳴し、新たな写生図や花卉図へと展開していったのです。現存するだけでも、尾形光琳による模本や女性画家・清原登信の模本などがあります。

江戸時代初期の写生図に起因するモチーフとしては、トリカブトをあげることができます。本画においては、渡辺始興筆「四季花木図屏風」(東京・島山記念館)や近衛家燕筆「花木写真図巻」(京都・陽明文庫)に描かれた新しいモチーフです。撰閣家筆頭・近衛家燕は常信とも交流がありました。常信の写生図を知っていたであろう家燕が「花木写真図巻」を制作し、近習の絵師・始興が「四季花木図屏風」にトリカブトを描き込んだのです。写生図から花卉図への道筋を示す一例といえます。

また常信が写生したクマガイソウ(図7)が伊年印「草花魚貝虫類」(東京・根津美術館)や石田圖汀筆「四季草花図屏風」(京都・

三時知恩寺)に描かれています。幽汀は狩野派に学び、応華の師と伝えられる絵師です。伊年印「草花魚貝虫類」は喜多川相説筆に比定されますが、相説の活躍期は始興と同時代とも考えられています。また北尾重政の『雑詠名知折』(1781年)にも「布袋草」(参考図3)と記されクマガイソウが描かれています。おそらくクマガイソウは17世紀末から18世紀に描かれた最初のモチーフで、それをいち早く捉えていたのが常信の写生図といえます。

江戸時代の新たな花卉図の出発点にあった探幽・常信の写生図が、どのように伝播していったのかをたどることはなかなか難しく、今後の大きな課題です。豊かな園芸文化や本草学・博物学の興隆を背景として、多彩な草花、鳥や動物たちが絵画に溢れていった愛すべき江戸文化。その初期に探幽・常信の写生図があったことを、心にとどめていただければ幸いです。



(図7) 草花魚貝虫類写生図巻 巻14「クマガイソウ」 狩野常信筆 東京国立博物館 江戸時代・宝永6年(1709)



(参考図3) 『雑詠名知折』 北尾重政画 国立国会図書館蔵 江戸時代・安永10年(1781)

探幽・常信の写生図関係年表

和暦	西暦	狩野探幽	狩野常信	本草学・博物学関連
寛永13年	1636		常信誕生	
寛永15年	1638	探幽、法眼に叙される		
慶安3年	1650	探幽、水戸藩邸で発見された斑の鴨を写生する	常信の父・尚信没。常信、父の家督を継ぐ	
承応3年	1654	探幽、オランダ商館長ハッパートと会合か		井上政重、オランダ商館を通じて「ラテン語による解剖書」を入手
承応4年	1655	探幽、オランダ商館長ウィニクスと会合か		
明暦2年	1656	探幽の屋敷が焼失する		
万治2年	1659			オランダ商館長、ドドネウス著『草木誌』を献上するが返却される
寛文元年	1661	探幽、「草花写生図巻」(東京国立博物館)を描きはじめる	常信、「草花魚貝虫類写生図」(東京国立博物館)を描きはじめる	
寛文2年	1662	探幽、内裏障壁画制作。法印に叙される	常信、探幽の内裏障壁画制作に参加する	
寛文3年	1663			オランダ商館長インダイク、ヨンストン著『動物図説』を献上
寛文4年	1664		常信、「鳥写生図巻」(東京国立博物館)を描きはじめる	最初の園芸書『花壇細目』刊行
寛文5年	1665	探幽、合作「群獣図巻」(個人蔵)を描く	常信、探幽らとの合作「群獣図巻」を描く	
寛文6年	1666			最初の百科事典『訓蒙図彙』刊行
寛文10年	1670	オランダ医師マルコン、探幽を診察するか		
延宝2年	1674	探幽没		
延宝3年	1675		常信、幕府の無人島(小笠原諸島)探検隊が持ち帰った「タコノキ」等を写生するか	幕府、小笠原諸島に探検隊を派遣
天和元年	1681		常信、堀田正俊と芝浦で釣りをする	
天和2年	1682		常信、二十人扶持を拝領	
元禄10年	1697			人見必大『本朝食鑑』刊行
元禄14年	1701		常信、徳川光圀の遺像を描く	
元禄15年	1702		常信、柳沢吉保の肖像を描く	
宝永元年	1704		常信、法眼に叙される	
宝永6年	1709		常信、賢聖障子絵を描く。法印に叙される	貝原益軒『大和本草』刊行
正徳2年	1712		「草花魚貝虫類写生図」に最後の年紀	
正徳3年	1713		常信没	

展示リスト

名称	員数	作者・著者	時代など	列品番号
立花図屏風 左隻	6曲1双のうち	筆者不詳	江戸時代・17世紀	A-1067
草花写生図巻 雑	1巻	狩野探幽筆	江戸時代・17世紀	A-216-4
草花写生図巻 秋	1巻	狩野探幽筆	江戸時代・17世紀	A-216-3
果実図	3幅	狩野探幽筆	江戸時代・17世紀	A-1134
草花魚貝虫類写生図巻 巻6	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-6
草花魚貝虫類写生図巻 巻7	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-7
草花魚貝虫類写生図巻 巻8	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-8
草花魚貝虫類写生図巻 巻10	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-10
草花魚貝虫類写生図巻 巻13	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-13
草花魚貝虫類写生図巻 巻14	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-14
草花魚貝虫類写生図巻 巻16	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-16
草花魚貝虫類写生図巻 巻18	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-18
草花魚貝虫類写生図巻 巻19	1巻	狩野常信筆	江戸時代・17～18世紀	A-4555-19
唐画手鑑	4帖のうち2帖	狩野常信他模写	江戸時代・17～19世紀	A-6742
草木誌	1冊	レンベルトゥス・ドドネウス著	ベルギー・1644年版	(図書) 帝洋N-31

江戸の写生図—可憐なる花卉図の源泉— 2015年9月29日発行

執筆：小野真由美(東京国立博物館貸与特別観覧室 主任研究員) / 撮影：東京国立博物館登録室 / 英訳：東京国立博物館国際交流室

編集：東京国立博物館出版企画室 / デザイン・制作・印刷：精興社 / 発行：東京国立博物館

※本特集・リーフレットはJSPS科学研究費25370150「江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究」の助成の成果です

©2015東京国立博物館

